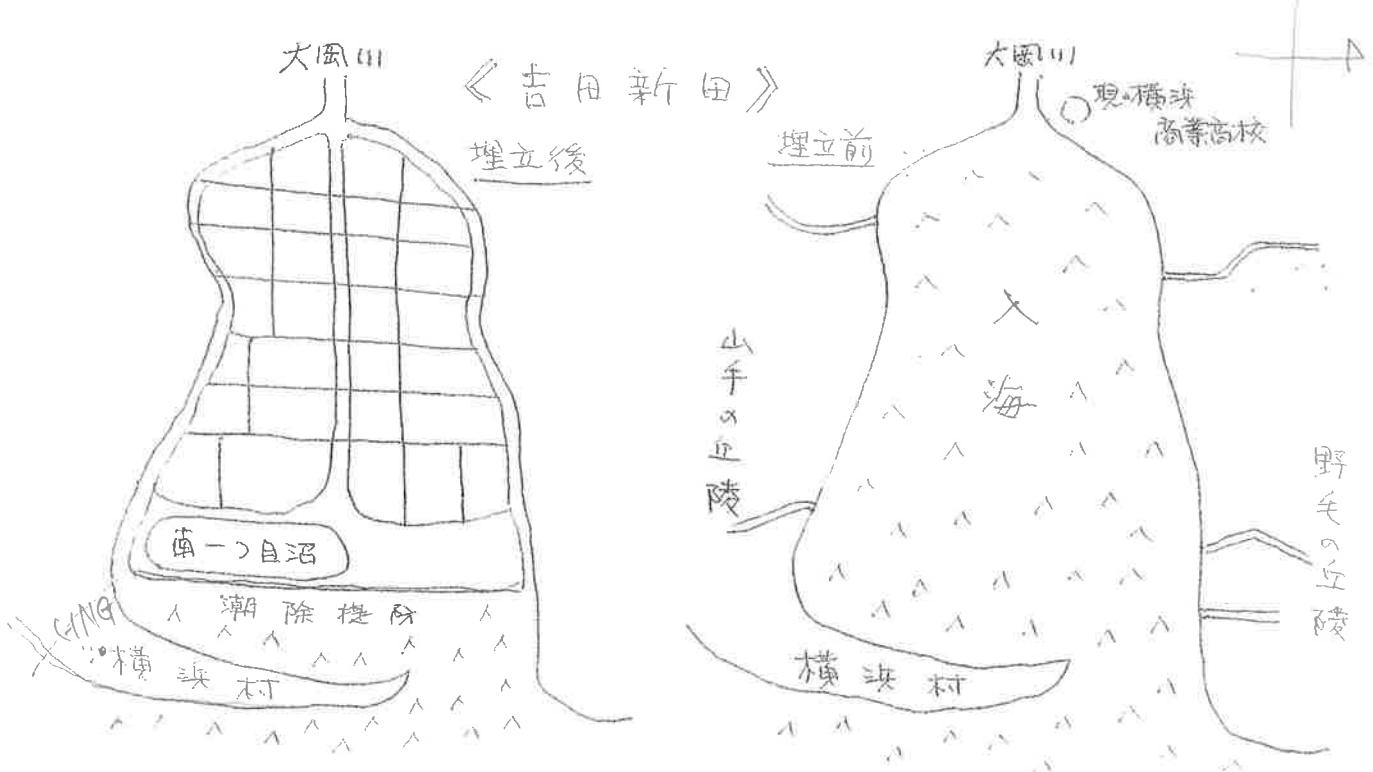


ことぶきで暮らす人々あれこれ 30

閑話休題

寿地区今昔 寿の成り立ち ①

寿地区とその周囲は、昔、野毛丘陵と山手丘陵に囲まれた浅い入海でした（下図の参照）。徳川幕府の四代将軍の許可を得て、江戸の材木商である木村勘兵衛が埋め立てました。埋立地は吉田新田と言い、難儀の末10年かけて完成しました。そのため「おさん」という女性が人柱として犠牲にされたといい伝えが残っています。埋立地の氏神は京浜急行南太田駅近くの日枝神社ですが、その故事にちなみ通称お三宮と言われています。埋立地面積は、112町で水田が8割ほどを占めていたといいます。



この埋立地は、中央の中川をはさんで右を北、左を南とし交差する6本の農道で一つ目、二つ目と区切り、それぞれを南一つ目、北一つ目とか呼びました。当時、寿地区はこの埋立地全体の遊水地で「南一つ目沼」と呼ばれていました。

時移り、明治なり横浜は開港後大きく発展しました。港の後背地として「南一つ目沼」の埋め立てが計画されました。6年ほどかけて明治9年に埋め立てが完成しました。埋立地の町名は謡曲から採ったと由来されています。南から松影、寿、扇、翁、不老、万代、蓬萊の各町で「埋め地七ヶ町」と呼ばれています。通称「埋め地」とも呼ばれています。

次回は 寿の成り立ち ②